

校長室通信

令和6年9月3日号
志免町立志免西小学校
高良 祐治

夏休みが終わり、元気な子どもたちの声が校舎をにぎやかにしています。朝、校門であいさつをしながら子どもたちの様子を見ていますと、一回り大きくなった姿や夏休みの作品を持ってやる気に満ちた表情で登校してくる子どもたちが多く見られ、充実した夏休みを過ごしたことが想像できます。前期前半が終了まであと1ヶ月と少しですが、早く学校の生活リズムを取り戻して、毎日元気に楽しく学校生活を送ってほしいと思っています。

自ら学ぶためには

3人の石工の話をご存じでしょうか。

あるとき旅人が、金づちとのみで石を削っている男たちに出会い、何をしているのか聞いたところ、一人目の男は「石を削っているのだ。」と答え、二人目は「柱を作っているのだ」と答え、三人目は「町のみんなの心のよりどころとなる教会を作っているのだ」と答えた、という逸話です。

子どもたちは、毎日様々な教科の学習に励んでいます。たとえば算数では教科書に載っている問題を、国語では教科書に載っている物語を、体育では先生が用意した運動を、何の疑いもなく指示どおりに問題を解いたり活動したりしています。私たち教員も、年間計画に従って授業を進め、少しでも定着するよう漢字の練習や計算ドリルなどの宿題を出し、やってきていない子どもやわかっている子どもには繰り返し何度も課題をやらせたりしているときもあります。

さて、このような学習環境で、日々学習している子どもたちは、学習に対してどのような心持ちで取り組んでいるのでしょうか。授業は「次は何をすればいいのかな?」「それはノートに写すのかな?」と指示を待ち、宿題は「あと〇回書いたら終わる」「あと〇問解いたら終わる」とこなすことが目的となってしまう、一人目の石工のようになってしまわないでしょうか。このような苦行を経て身に付いた学力は、定着しないばかりか、勉強嫌いの子どもの育ててしまいます。

もちろん将来の夢のために、どのような教科もしっかりと目的を持って学習に取り組むような理想的な“神童”になることはなかなか難しいことだと思います。しかし、ますます予測不可能な時代を生き抜いていく必要がある子どもたちが、将来自分で必要な知識や技能をアップデートし、考えたり決めたりしていくことができるようにしておくためには、“今”自分から主体的に学習に取り組んでいこうとする習慣を身に付

けておく必要があると思います。そのために、本校では自ら学ぼうとする子どもの姿を大切にしています。

もちろん学校としても、子どもたちが興味関心を持って学習に取り組んだり、自分の考えをつくったり、課題についてみんなで話し合ったりするような授業づくりに取り組んでいこうと、様々な研修に参加したり、授業の進め方の工夫を取り入れたりしています。子どもたちが「わあっ、どうしてかなあ?知りたい!」「あれ?これはもうちょっと考えてみないといけないな!」と進んで学ぼうとするような授業は一朝一夕には難しいのかもしれませんが、そのような姿勢を教師が持ち続け挑戦し続けることが大切なのだと思います。保護者の皆様におかれましては、お子様の学びを温かく見守り応援していただきますようお願いいたします。

ほめると本当にいいのか

子育てに関する情報誌などでは、「子どもはほめて育てましょう」といったことが書かれています。ほめ言葉は、励ましのメッセージであると同時に効果的なアドバイスの役目も果たします。自己効力感を押し上げ、その後の活動へのモチベーションにもなります。

一方で、次のようなマイナス面も指摘されています。

- ・ 簡単なことでほめられると「自分はこの程度か」と推測してしまう。
 - ・ ほめられることが目的となってしまう。
 - ・ 「次もうまくやらなければ」という過度なプレッシャーを与えてしまう。
 - ・ 他の人がほめられると「ねたみ」の感情が起きる。
- このほかにも、勉強しているときに「よく勉強しているね。すごいね」とほめられることで、「親は自分にもっと勉強させたいんだ」という「価値観の押しつけ」を感じ、やる気が失せる場合もあるようです(参考:鹿毛雅治「モチベーションの心理学」)。

ほめることはおだてることではなく、我々大人にも子どもに対して誠実さが必要なようです。